

K- 718

天童市埋蔵文化財調査報告書第25集

天童市押切遺跡

—都市計画道路柏木久野本線整備に係る埋蔵文化財調査報告書—

平成13年3月

天童市建設部都市計画課
押切遺跡緊急発掘調査団

天童市押切遺跡

—都市計画道路柏木久野本線整備に係る埋蔵文化財調査報告書—

序 文

天童市大字久野本字古井戸付近は、扇状地の扇端部に立地し、多くの湧水がわき出る水利に恵まれた土地柄にあります。

今から約五千年以上も昔、縄文時代の前期にはこの地に人々が暮らしを営んでいたようです。その後、時代を経て平安時代頃には、竪穴住居、掘立柱建物を中心とした集落が営まれ、現在は、市内でも有数の果樹地帯として、リンゴ、サクランボ等の生産が行われています。

押切遺跡緊急発掘調査団では、このたび、都市計画道路柏木久野本線の整備に先立ち、天童市長より委託を受け、発掘調査を実施しました。竪穴住居、土坑等のほか、平安時代の土師器、須恵器等が出土し、この地域一帯の歴史を考えるうえで貴重な資料が出土しています。

本書を今後の調査研究、あるいは埋蔵文化財に対する普及啓発の一助となるように御活用いただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査のために御指導、御協力いただきました地元の方々、作業員のみなさまをはじめとする関係諸機関、諸氏に厚くお礼申し上げます。

今後とも適切な御助言、御指導を賜りますようお願い申し上げ、ごあいさつとします。

平成13年3月

押切遺跡緊急発掘調査団

団長 川崎利夫

例　　言

- 1 本書は、都市計画道路柏木久野本線の整備に係る埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査から報告書の刊行に至る業務は、天童市長との委託契約に基づき、押切遺跡緊急発掘調査団が実施した。
- 3 調査要項は、下記のとおりである。

遺跡名 押切遺跡

所在地 山形県天童市大字久野本字古井戸地内

遺跡番号 平成元年度登録（天童市遺跡番号168）

調査期間

発掘調査 平成12年8月21日～平成12年9月28日

整理作業 平成12年11月1日～平成13年3月10日

調査担当

調査団長 川崎利夫（山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館長）

主任調査員 押野一貴（天童市教育委員会社会教育課主事）

調査員 山澤護（天童市教育委員会社会教育課日々雇用職員）

調査補助員 山田徹（天童市教育委員会社会教育課日々雇用職員）

事務局

事務局長 深瀬正人（天童市教育委員会社会教育課長）

事務局次長 高橋秀司（天童市教育委員会社会教育課副主幹）

事務職員 押野一貴（天童市教育委員会社会教育課主事）

- 4 本書の執筆は、高橋秀司の指導のもと、I、II、III-2・3、IV-1を押野一貴が、III-1、IV-2を山澤護が執筆した。
- 5 発掘調査から本書の刊行に至るまで、天童市建設部都市計画課、山形県教育庁文化財課、（財）山形県埋蔵文化財センター、北野博司氏より御指導、御協力をいただいた。記して謝意を表する。
- 6 本調査で出土した資料は、天童市教育委員会で一括保管する。

凡　　例

- 1 本書で使用した遺構の略号は以下のとおりである。
S T—竪穴住居跡 S K—土坑
- 2 カマドソデは、スクリーントーンで表現してある。

本文目次

第Ⅰ章 序	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 遺跡の立地と環境	1
第3節 周辺遺跡と歴史的環境	1
第Ⅱ章 調査の概要	5
第1節 平成5年度の調査について	5
第2節 調査の方法と経過	5
第Ⅲ章 遺構と遺物	10
第1節 竪穴住居跡	10
第2節 土坑	13
第3節 遺構外出土遺物	15
第Ⅳ章 まとめ	18
第1節 遺構について	18
第2節 遺物について	18
引用参考文献	19
報告書抄録	

挿図目次

第1図 周辺の遺跡	3
第2図 周辺地形及び調査区設定図	6
第3図 平成5年度遺構配置図	7
第4図 調査範囲及びグリッド設定図	8
第5図 遺構配置図	9
第6図 ST001実測図・出土遺物(1)	11
第7図 ST001出土遺物(2)	12
第8図 ST002実測図・出土遺物	14
第9図 土坑実測図(1)	16
第10図 土坑実測図(2)	17
第11図 遺構外出土遺物	17

表 目 次

第1表 押切遺跡出土遺物観察表.....20

図 版 目 次

- 図版1 調査区全景(1)
- 図版2 調査区全景(2)(東より)、作業風景、ST001全景(北より)
- 図版3 ST001カマド、遺物出土状況(1)、(2)
- 図版4 ST001遺物出土状況(3)、ST002全景(南より)、カマド断面
- 図版5 SK001・002・003・004・007
- 図版6 SK009・011・012
- 図版7 SK013
- 図版8 出土遺物(1)
- 図版9 出土遺物(2)
- 図版10 出土遺物(3)

第一章 序

第1節 調査に至る経緯

都市計画道路柏木久野本線は、国道48号久野本交差点から都市計画道路天童山形空港線を結ぶ重要な路線であり、市街地環状道路網を構成する北部幹線道路として平成2年に都市計画決定された道路である。

平成9年度より事業に着手し、平成13年度までに、全体延長413mがすべて完成の予定であり、東西を結ぶ幹線道路として早期完成が見込まれている道路である。

柏木地区の整備は平成13年度であるが、道路整備に先立ち、路線内の埋蔵文化財の調査を実施することとなった。

これに基づき押切遺跡緊急発掘調査団では、天童市長と委託契約を締結し、押切遺跡の発掘調査を平成12年の8月から9月にかけて実施した。

第2節 遺跡の立地と環境

押切遺跡は、天童市大字久野本字古井戸地内に所在する。天童市は、山形盆地のほぼ中央部に位置し、北を乱川、南を立谷川、西を最上川、東を奥羽山脈によって画されている。

乱川、立谷川は奥羽山脈に水源を発し、西方の最上川へ流れ込んでいるが、増水時の土砂の流出により広大な扇状地を形成している。また、市西部地域には、最上川の氾濫による広大な後背湿地が形成されている。

遺跡周辺は、乱川扇状地の扇端部にあたり、湧水が豊富である。付近には、同じく奥羽山脈に水源を発し、天童市の中央部を流れる押切川があり、遺跡はその自然堤防の微高地に立地する。

周辺を含めた現況は、サクランボ、リンゴ、もも等の、天童市でも有数の果樹地帯となっている。

第3節 周辺遺跡と歴史的環境（第1図）

押切遺跡は、平安時代の集落遺跡である。今回調査した区域の西側に都市計画道路天童山形空港線があり、平成5年に道路改良工事の際に、山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施し、平安時代の竪穴住居、掘立柱建物等が出土している。

天童市内においては、近年東北中央自動車道の整備に伴い、本格的な発掘調査が実施されてきている。その他の多くの遺跡は、表採資料によって確認された遺跡であるが、天童市史等を参考として周辺の遺跡を概観しておきたい。

周辺遺跡のうちもっとも古いものでは、縄文時代前期に属する柏木遺跡（1）がある。押切遺跡からは、西南方向へ約300mの近さであり、遅くとも縄文時代前期頃からこの周辺

に人が住み着いたことがわかる。

中期から後期にかけては、伝覚平（2）、上貫津（3）のように山麓の湧水地や小河川の付近、または清池（4）、中里Bのように扇状地の湧水地に多く分布がみられるようになる。

後期後半から晩期にかけては遺跡数が増加する。高木石田（5）、白山堂（6）、毘沙門寺（7）、綿掛B（8）等、扇状地の扇端部から後背湿地に遺跡の分布がみられるようになる。

また、立谷川扇状地の扇央部側縁に所在する宮田遺跡は、数ヘクタールにも及ぶ大集落遺跡であり、多くの土器、石器等の遺物が出土している。

立谷川扇状地の扇端部に位置する砂子田遺跡（9）は、縄文時代の遺跡において、発掘調査が実施された数少ない遺跡の一つであり、後期の竪穴住居を中心とした集落跡が検出されている。

晩期から弥生時代にかけては、押切遺跡西方に位置する成生地区において多くの遺跡が確認されている。弥生時代の遺跡は、その他の時代と比較して数が少ないが、そのほとんどが成生地区に集中している。成生地区は、押切遺跡同様乱川扇状地によって形成されたものであり、その微高地上には、地蔵池A（10）、金谷（11）、熊野堂前（12）、瓜小屋（13）等がある。中でも地蔵池A遺跡からは、炉を伴う住居跡の一部や、埋甕等が出土している。

古墳時代にはいると、扇状地の扇端部から天童低地まで、最上川の氾濫源の東端に沿って遺跡が広く分布している。

前期の遺跡としては、塙野目A（14）、高木原口（15）、板橋2（16）、中期では的場（17）、藏増押切（18）、後期では順正壇（19）、鍋田（20）、西沼田（21）等が挙げられる。

西沼田遺跡は、大量の木製遺物及び建築部材を出土した遺跡として大変貴重なものであり、国指定の史跡となっている。

古墳については、原形をとどめているものがほとんどなく、わずかに上遠矢塙古墳が墳丘の面影を残しているのみである。

この古墳の西側には、下遠矢塙古墳があったといわれているが、明治35年の高櫛小学校建設の際に、土砂として利用され失われてしまっている。

遠矢塙古墳の南、清池八幡神社の近くにも火矢塙1号墳（22）、2号墳（23）が並んでいたといわれているが、明治初年の地籍図にその存在を確認するのみとなっている。1号墳からは、割竹形木棺が出土したといわれているが、定かではない。

上遠矢塙古墳は、昭和50年から51年にかけて天童市史編さん室によって発掘調査が実施されている。その結果、径約24mの円墳で、外周には幅約5m、深さ約0.5~1.2mの周濠が巡っていたこと、墳丘の崩落を防ぐために版築で土を盛り固めた後、墳丘の下部と上部の墳頂を囲むように幅約1mの砾石帯が葺石状に張り付けられていたことが明らかとなっ



た。

古墳時代後期では、成生古墳群(24)や八幡山古墳群(25)等の群集墳が形成されている。

奈良時代にはいると、律令体制の整備に伴い、天童市内においても8世紀後半には条里制が施行されていたと推測される。二条条里遺構(26)、千刈条里遺構(27)にその名残を認める能够なほか、明治初年の地籍図等で、高瀬地区、成生地区、貫津地区等に広くその痕跡をみることができる。

集落跡は、老野森の光戒院(28)や天童温泉街の北側にある千刈(29)、糠塚を含む一帯と、清池の西方にある礼井戸(30)、芳賀の東の桜段(31)、岡屋敷(32)、芳賀古屋敷(33)、現長岡团地の中里B(34)等が立谷川扇状地の扇中央部に位置し、一方で同扇状地扇端部には、中袋(35)、塚野目B(36)、小矢野目(37)、地蔵池B(38)、藏増北B(39)等が位置している。

また、この時期の窯跡としては、石倉窯跡(40)、貫津御阿弥陀窯跡(41)、二子沢窯跡(42)、原崎窯跡(43)、瀬戸山古窯跡(44)、荒井原窯跡(45)、谷地中窯跡(46)等が確認されている。

中世においては、藏増押切遺跡、二階堂(47)、高野坊(48)等、成生庄に関連した遺跡が形成される。

成生庄は、現在の天童市のほぼ全域を含み、安元2年(1167)『八条院目録』に「出羽国大山成生庄」の記載が見えることから、12世紀頃には成立していたと考えられている。

二階堂遺跡は、大清水集落の北側に位置する、一辺120m、つまり一方一町を幅約12mの空塹で囲まれた一画であるが、「二階堂」という地名から、鎌倉幕府の地頭であった二階堂氏の館もしくは成生庄を管轄する政庁跡ではないかと考えられる。

また、この遺跡の南側に隣接して高野坊遺跡がある。平成8年度に天童市教育委員会が実施した調査において、成生庄や時宗の動向を示す墨書きが多量に出土し、当時の様相が明らかになりつつある。

県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した藏増押切遺跡からも、ほぼ同時期の有力豪族の館とも考えられる大型の掘立柱建物跡や井戸跡が検出されており、二階堂、高野坊の存在とあわせて注目されるところである。

第Ⅱ章 調査の概要

第1節 平成5年度の調査について（第2・3図）

押切遺跡は、都市計画道路天童山形空港線の道路改良工事に伴い、山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施している。

調査期間は、平成5年5月7日から同年7月29日まで、調査面積は4,000m²に及ぶ。調査区間の位置関係は、今回実施した調査区域に対して西北側に位置し、B調査区の南約40mのところに連結することとなる。

調査の結果、A、C調査区では、河川跡と若干の土坑が検出されたのみであったが、B調査区では竪穴住居跡を中心とした集落跡であったことが確認されている。

竪穴住居跡は計7棟検出されている。規模は小さめで、一辺の大きさが3～5mであり、主軸方向は若干東にふれながらも、ほぼ南北方向となっている。カマドはすべての住居に認められるが、一棟を除き住居南壁に、主軸から東西にずれて構築されている。

掘立柱建物跡は1棟のみ検出されている。主軸方向は、竪穴住居同様南北方向から若干東にふれている。

出土遺物は土師器、須恵器、赤焼土器、石製品、鉄製品が出土している。遺構との関係は、必ずしも明らかではないが、全体の特徴から8世紀後半から9世紀にまたがる時期が想定されている。

また、遺跡の広がりについても、B調査区を中心として東西方向に広がることが想定された。

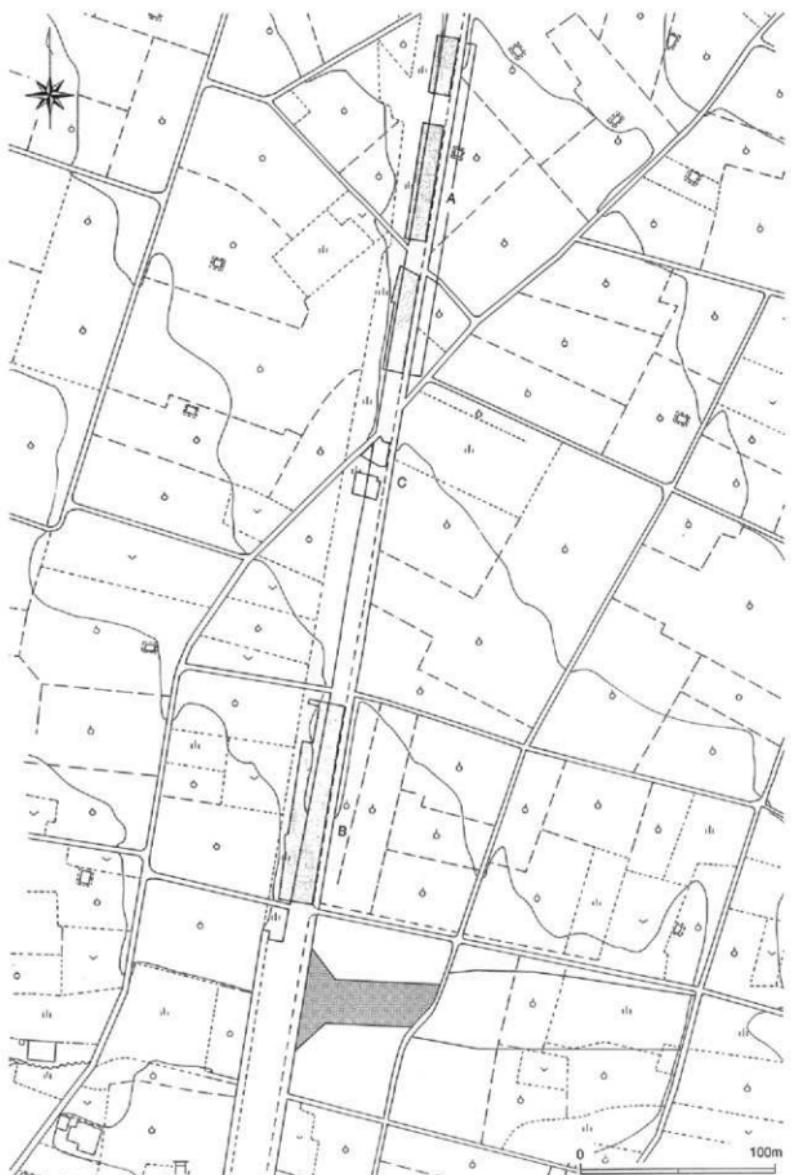
第2節 調査の方法と経過（第4・5図）

前述のとおり、平成5年度の調査において遺跡の範囲が東西方向に広がることが予測されていた。従って、はじめに遺跡の範囲を確認するための確認調査を実施した。調査の範囲については、計画法線のうち、山形天童線から東へ100mまでを、幅2mのトレーナーを設けて実施した。その結果、東へ約65mのところにある農道のところまでの範囲で、遺構、遺物が出土することが確認されたため、同範囲を記録保存調査の対象と設定した。

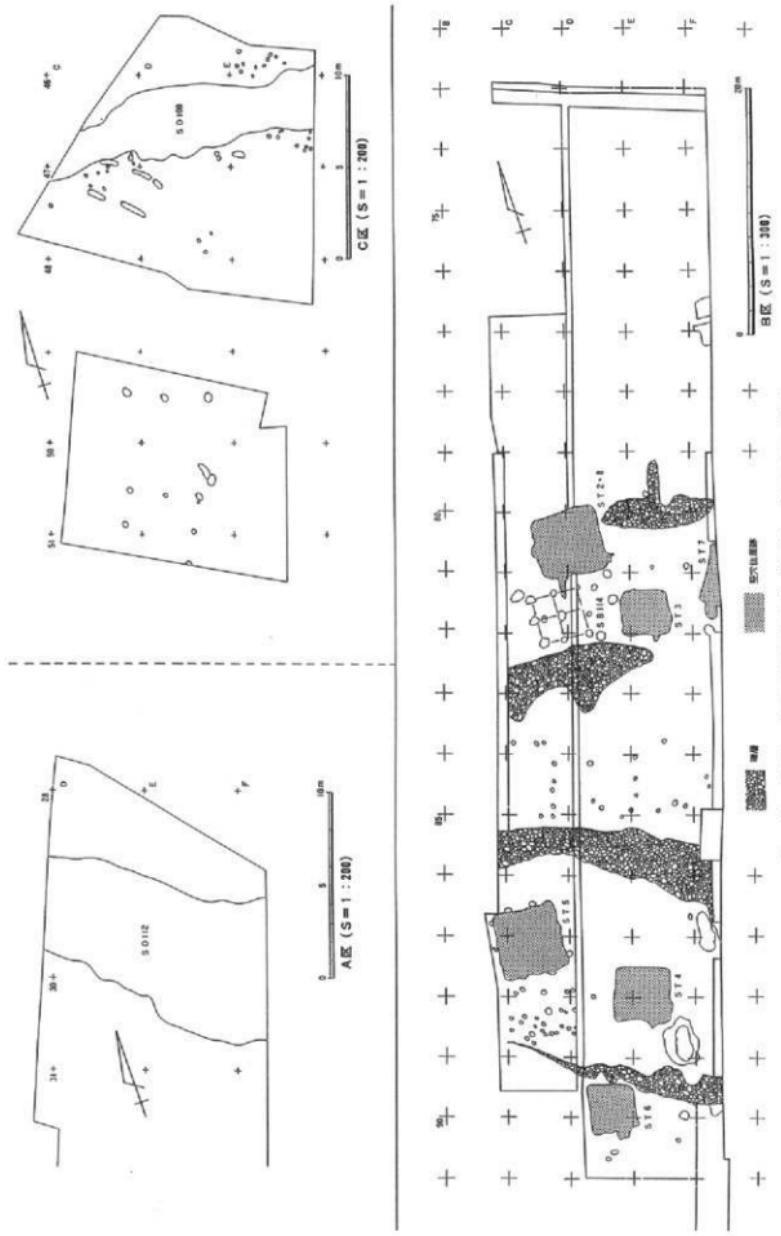
調査区域は、幅20m、長さ60mにわたり、面積は1,200m²である。はじめに4m方眼のグリッドを東西方向に、西から東へ1～17グリッド、南北方向に北から南へ1～10グリッドを設定し、東西～南北の順で1～1、2～1の様に呼称した。

現地調査については、平成12年8月21日から平成12年9月28日までの、延べ39日間である。整理作業については、調査終了後、平成12年11月1日から開始し、平成13年3月10日まで行い、併せて報告書の刊行作業を行った。

調査の結果、平安時代に属する竪穴住居跡が3棟検出されたほか、若干の土坑、土師器、須恵器などの遺物が出土している。

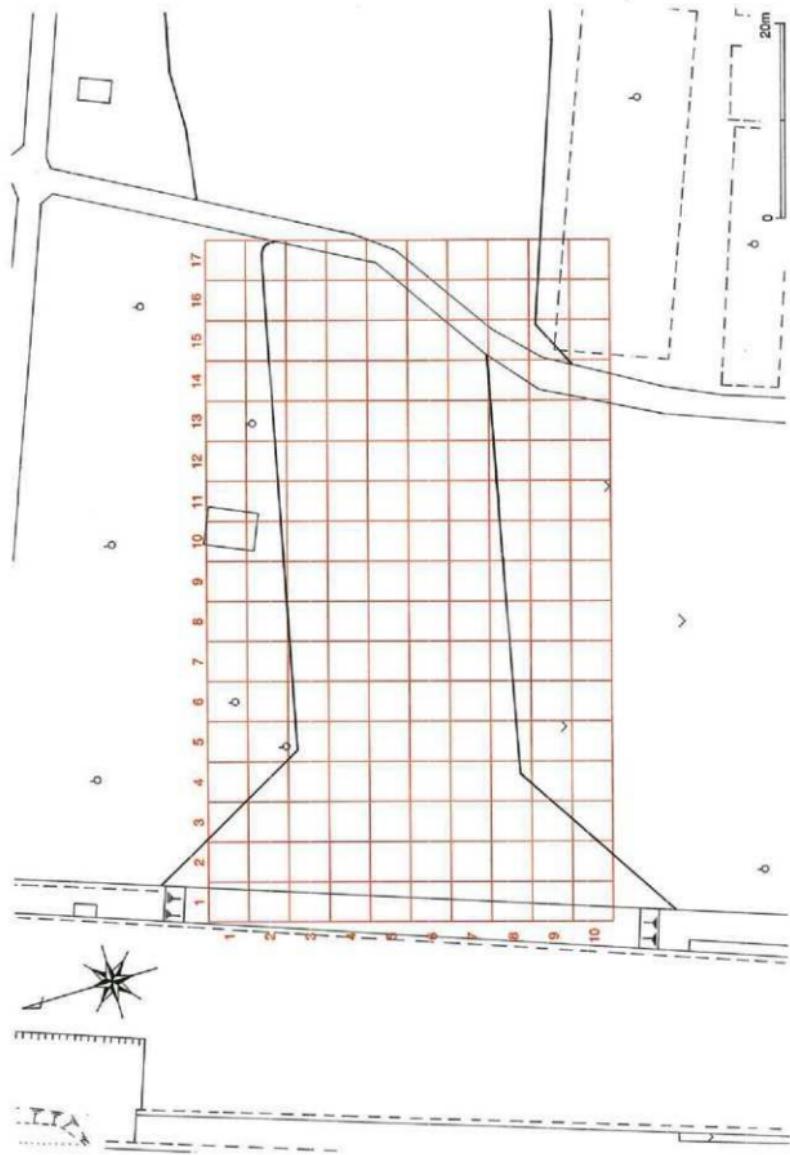


第2図 周辺地形及び調査区設定図（斜線部一平成5年度、網部一平成12年度）

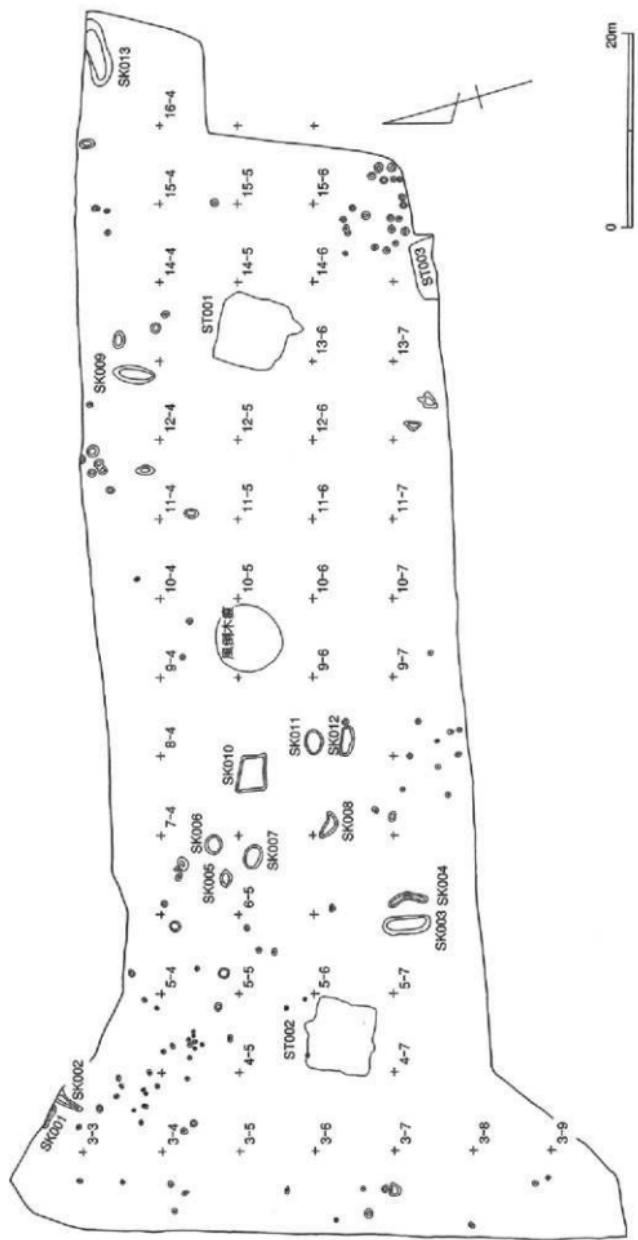


第3図 平成5年度造構配置図（浅黄・志田1994より）

第4図 調査範囲及びグリッド設定図



第5図 遺構配置図



第Ⅲ章 遺構と遺物

第1節 積穴住居跡

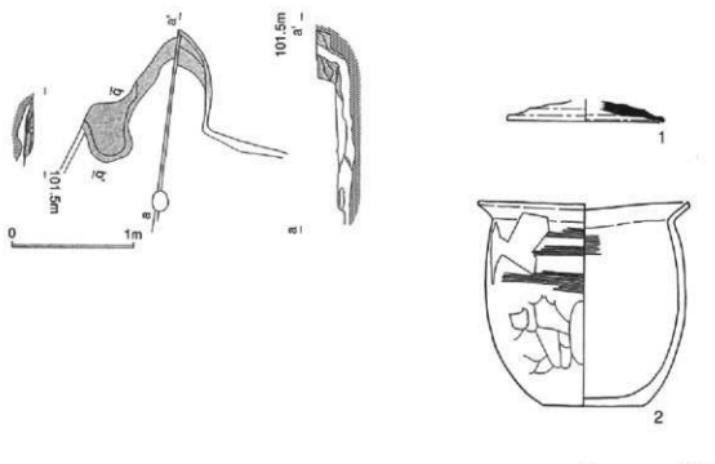
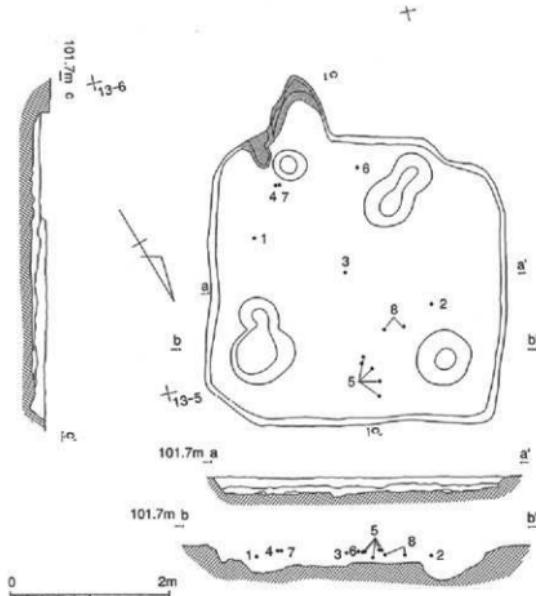
S T 0 0 1 (第6・7図)

13-6に位置する。長軸で3.65m、短軸で3.6mを測る、ほぼ方形に近い形状である。主軸方位はN-29°-Eである。カマドは南壁やや東よりに構築され、遺存状況は良くない。上部構造は確認できず、燃焼部・ソデ部・煙道部等の確認にとどまった。ソデ部は左ソデしか残っておらず、カマドの規模の把握は困難であった。また、ソデは粘土による作りだし構築で、土器片を補強剤として用いている。煙道部は、約60cmの長さを持ち、南向きに延びている。燃焼部は、焼土の堆積は比較的薄く、遺物は出土していない。カマド内の支脚は検出されなかった。また、燃焼部の焼土を除いたところ、ピット状の遺構が検出されたが性格は不明である。主柱穴は3本確認されているが、明確にアタリは確認されていない。また、柱穴覆土内からの遺物の出土はなかった。床面については、明確に貼床を検出することはできなかったが、カマド周辺において疎らな灰白色粘土の広がりが確認された。周溝は確認できなかった。

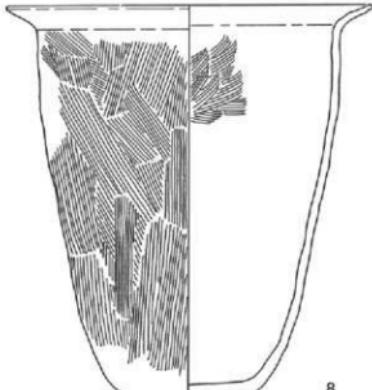
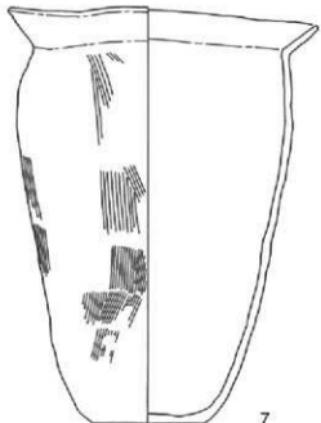
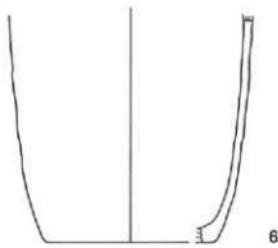
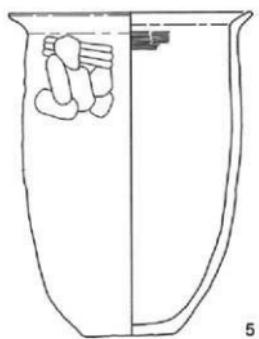
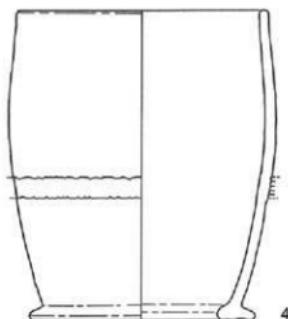
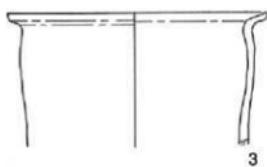
遺物は、土師器、須恵器、赤焼土器が出土している。器種は、甕、瓶、蓋であった。1はロクロ成形の須恵器蓋で、摘部は欠損している。これとセットになるような須恵器坏は出土していない。2は土師器甕である。S T 0 0 1から出土している他の甕とは異なり、比較的小型で丸胴を呈している。3は赤焼土器である。胴部から底部にかけて欠損しているため器種は不明であるが、形態・調整等から4と同一の甕である可能性が高い。4は赤焼土器の瓶である。胴部を巡るように剥離痕が認められるため、リング状の突帯が巡ると考えられる。5は土師器甕で長胴形を呈している。胴部上半にケズリ調整がみられる。6は大部分が欠損しているが、長胴形を呈する土師器甕と考えられる。7・8は土師器甕で、長胴形を呈している。7は外面にハケメ調整が施されている。8は内外面ともにハケメ調整がみられる。

S T 0 0 2 (第8図)

4-5-4-6に位置する。長軸で3.2m、短軸で3.15mを測る、ほぼ方形に近い形状である。主軸方位はN-28°-Eである。砂礫層に構築されているため、確認が非常に困難であった。カマドは北壁のほぼ中央部に構築され、S T 0 0 1と同じく上部構造は確認できず、左ソデしか残っていないかった。ソデ部は、粘土による作りだし構築で、ソデ内には土器片などの補強材は確認できなかった。煙道部は屋外にはほとんど延びず、約20cmの張り出しがあり、北向きに延びている。燃焼部については、焼土が薄く堆積し、須恵器坏が出土している。カマド内の支脚は検出されなかった。周溝、主柱穴、貼床については、い



第6図 ST001実測図・出土遺物(1)



0 10cm

第7図 ST 001 出土遺物 (2)

ずれも検出することができなかった。

遺物は、土師器、須恵器が出土している。器種は、壺、甕、蓋であった。1は、回転ヘラ切り痕を持つ須恵器壺である。2はロクロ成形の須恵器蓋であるが、摘部は欠損している。セットとなるような須恵器壺は出土していない。3は土師器甕である。胴部に粘土の付着があり、この付着は焼成後のものであることから、カマドとの接着に用いられたと考えられる。内外面にハケメ調整が施されている。4は土師器甕である。内外面にハケメ調整、口縁部内面にハケメ調整が施されている。

S T 0 0 3

13-7～14-7に位置する。南側半分以上が調査区外となっているため、住居の全体的な確認は出来ず、また残っている部分についても遺存状況は良くなかった。カマド、周溝、主柱穴、貼床ともに確認できなかった。

第2節 土坑（第9・10図）

S K 0 0 1

2-1に位置する。東北部分については調査区外となっており、平面形は不明であるがおそらく長楕円形を呈するものと想定される。長軸1.2m、深さ0.28mを測る。

S K 0 0 2

2-1に位置する。東北部分については調査区外となっている。溝状の平面形をなすと想定される。短軸0.64m、深さ0.16mを測る。

S K 0 0 3

5-6～5-7に位置する。ややいびつな長楕円形を呈する。長軸2.4m、短軸0.94m、深さ0.39mを測る。

S K 0 0 4

6-6～6-7に位置する。幅狭で、中央部で「く」の字状に折れ曲がっている。長軸2m、短軸0.3m、深さ0.16mを測る。

S K 0 0 5

6-4に位置する。楕円形を呈する。長軸0.86m、短軸0.6m、深さ0.32mを測る。土坑としたが、柱穴である可能性も考えられる。

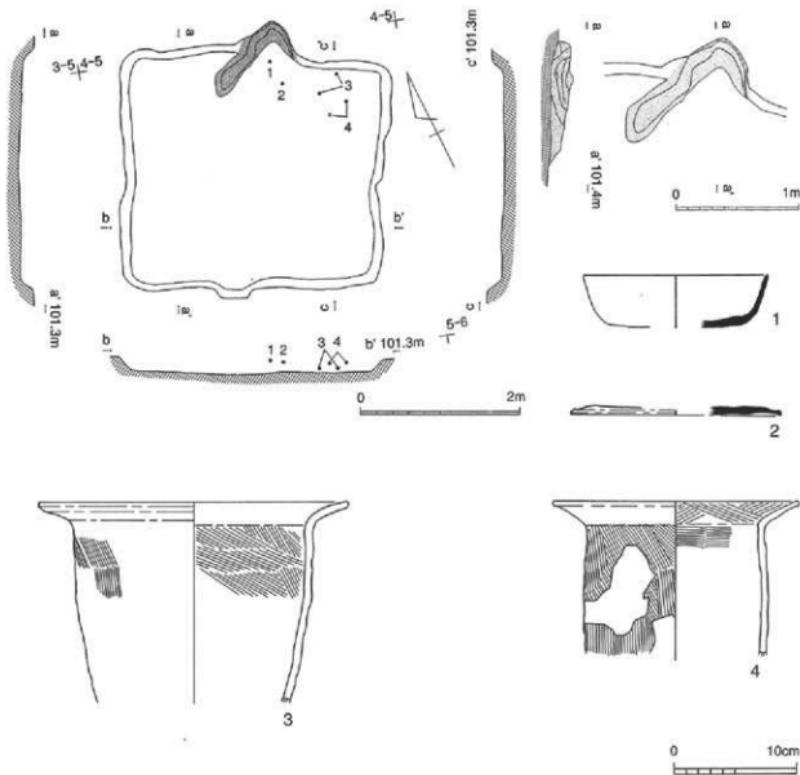
S K 0 0 6

6-4に位置する。ほぼ正円形を呈する。長軸0.96m、短軸0.78m、深さ0.4mを測る。SK 0 0 5同様柱穴の可能性が考えられる。

S K 0 0 7

6-5に位置する。楕円形を呈する。長軸1.2m、短軸0.94m、深さ0.24mを測る。

S K 0 0 8



第8図 ST 002 実測図・出土遺物

7-6に位置する。平面形は、不正円形である。長軸1.32m、短軸0.62m、深さ0.15mを測る。

SK 009

12-3に位置する。長楕円形を呈する。長軸2.04m、短軸0.88m、深さ0.26mを測る。

SK 010

7-5に位置する。一角が張り出す、正方形に近い形状である。長軸1.76m、短軸1.6m、深さ0.14mを測る。

SK 011

8-5～8-6に位置する。楕円形を呈し、長軸1.28m、短軸0.9m、深さ0.12mを測る。

SK 012

8-6に位置する。長方形に近い形状を呈する。長軸1.52m、短軸0.68m、深さ0.12m

を測る。

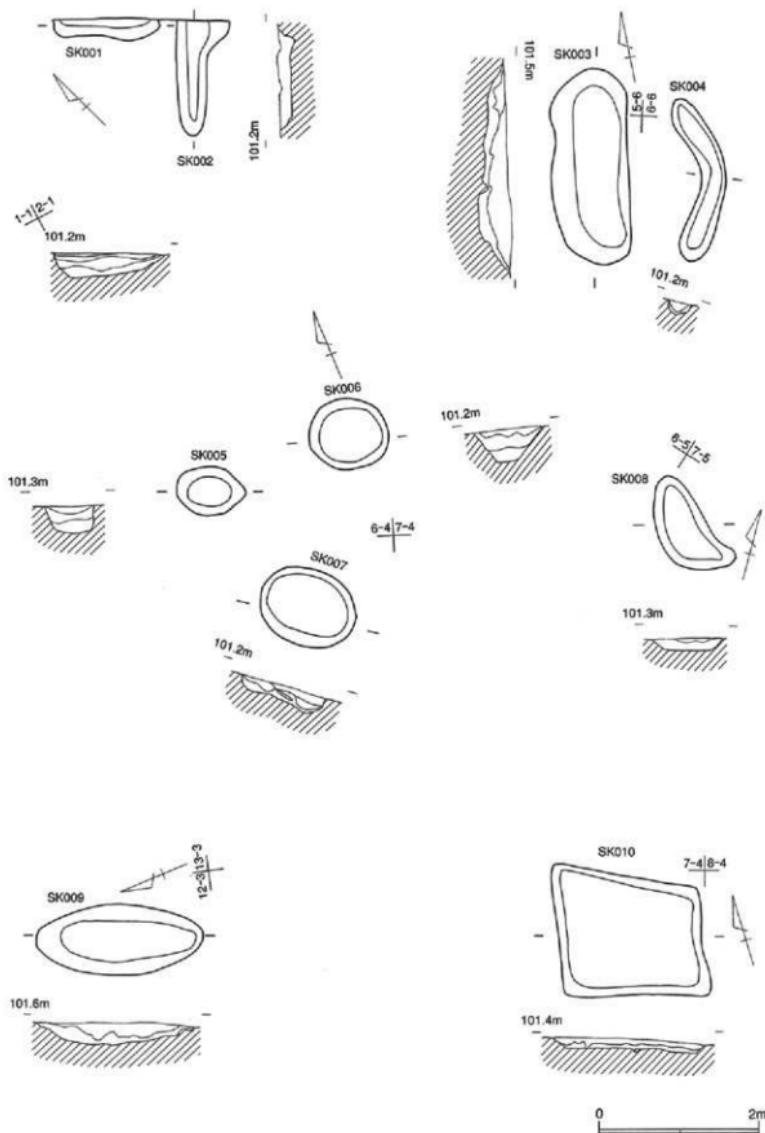
SK 013

16-3～17-3に位置する。北側の一部分は調査区外となっている。いびつな長楕円形となると想定される。長軸3.48m、短軸1.08m、深さ0.54mを測る。

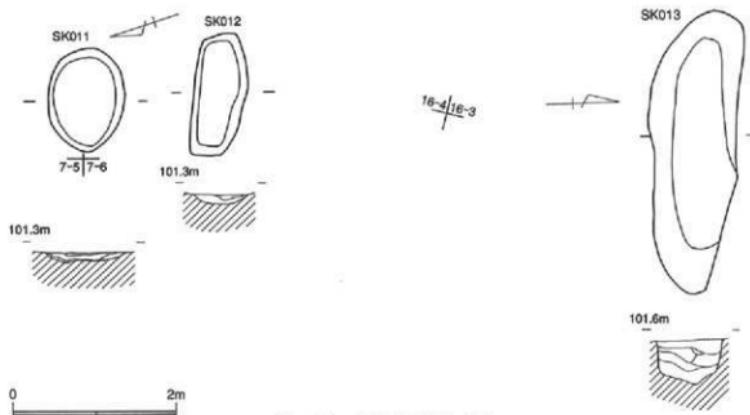
第3節 遺構外出土遺物（第11図）

縄文土器、石器、土師器、須恵器、赤焼土器が出土している。1はロクロ成形による須恵器坏である。底部は欠損しているので、切り離し技法は確認できなかった。2はロクロ成形による須恵器坏である。底部は回転糸切りによる切り離しで、胴部下半にケズリ調整がみられる。3は赤焼土器の坏である。底部は回転糸切りによる切り離しである。4は土師器甌の底部である。調査区西壁から出土している。5は須恵器甌の破片である。タタキ調整が施されている。

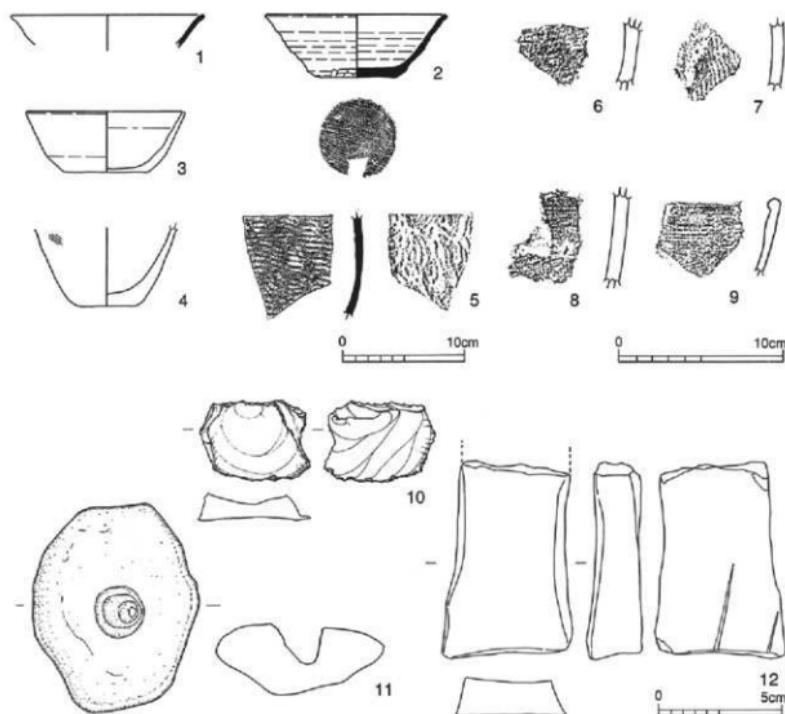
6～9は縄文土器である。6は、横位方向、斜位方向の順で描文を施している。7～9は縄文のみ施文されているものである。10は微細剥離痕を有する剥片である。幅広の剥片の周縁部に微細剥離痕が観察される。珪質頁岩製。11は凹石、12は砥石である。比較的小振りである。



第9図 土坑実測図(1)



第10図 土坑実測図（2）



第11図 遺構外出土遺物

第Ⅳ章 まとめ

第1節 遺構について

遺構は竪穴住居跡が3棟、土坑が13基検出されている。また、性格については判然としないが、少ビット群が数十基検出されている。

竪穴住居跡3棟のうち1棟は一部調査区外となっており、検討の対象から外すことにする。

S T 0 0 1、0 0 2共に正方形に近い形状をなす。大きさは0 0 1が $3.65\text{m} \times 3.6\text{m}$ 、0 0 2が $3.2\text{m} \times 3.15\text{m}$ となっている。主軸は、両者ともに南北軸から東へ 30° 弱ほどふれておりほぼ一致する。

平成5年度の調査例と比較すると、同じ3m台の大きさのものが2棟検出されており、また、主軸方向については、東にふれるという点では共通する。ふれ幅については、今回検出されたものが 30° 弱であるのに対して、平成5年度のものは、計測された7棟のうち6棟が 22° 以内に収束するという点で若干異なる。

カマドについては、今回出土のものは南壁、北壁に設置されたものが1棟づつである。一方、平成5年度のものは、1棟をのぞいてすべて南壁に設置されている。北壁設置のものと、南壁設置のものに年代的な差が認められるのかどうか等については、検討されていない。

今回の調査においても、確認されたカマドが2基と少ないが、構築形態については、ほぼ同一であることが確認できた。

第2節 遺物について

出土遺物のうち図示できたのは、土師器8点、須恵器6点、赤焼土器3点である。赤焼土器は、本報告書では、酸化焰焼成でロクロによる成・整形を行ったものとしている。そのほとんどは、S T 0 0 1からの出土である。

器種構成からは、甕8点、瓶2点、壺4点、蓋2点となっており、煮炊用具と比べると、供膳用具が少なくなっている。

技術、形態的特徴を概観すると、甕は非ロクロ成形で、口縁部が「くの字」状に外反する。ほとんどのものにハケメ調整が施されている。また黒斑を伴うことから、野焼きによる焼成と考えられる。瓶は2点が出土しているが（第7図3・4）、内1点は胴部下半が欠損しているために確実に瓶であるということは出来ないが、成・整形が他の1点と同じであることから、ここでは瓶として扱った。瓶の特徴は、ロクロ成形の後ヨコナデが施されており、酸化焰焼成の赤焼土器である。口縁部は「く」の字状に外反する。胴部中央を回るよう剥離痕が認められることから、リング状の突帯が巡ると考えられる。壺は、赤焼

土器が1点、須恵器が3点出土している。いずれもロクロ成形である。底部の切り離しは、2点が回転糸切りで（第11図2・3）、1点が回転ヘラ切りである（第8図1）。蓋は須恵器で、いずれも摘部分は欠損している。ロクロ成形で、口縁部はやや直立する形を呈している。

年代的には、山形盆地の平安時代前期の諸遺跡の様相と同様の特徴をもち、また平成5年の山形県埋蔵文化財センターの押切遺跡調査の出土遺物とほぼ同様の内容である。したがって、年代的には8世紀末から9世紀前半の年代が与えられるものと考える。

引用参考文献

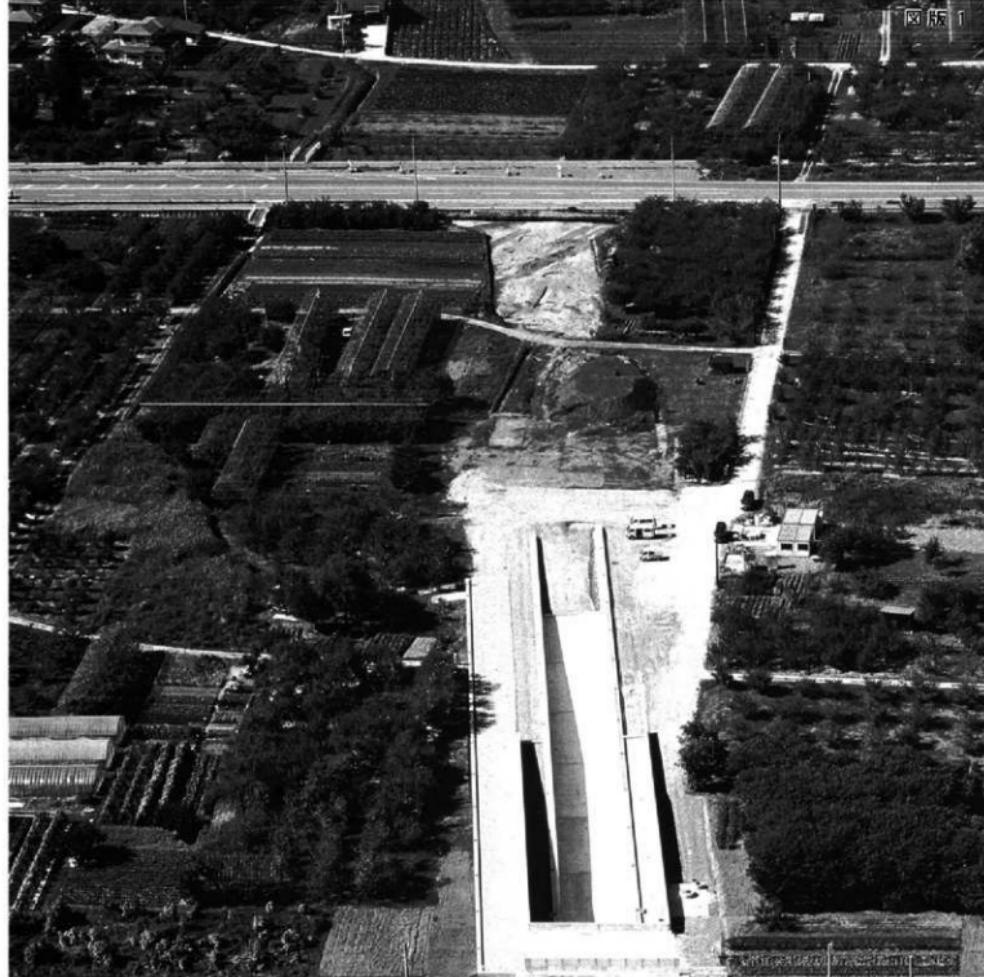
- 天童市史編さん委員会1978『天童市史 別巻上 考古・地理編』天童市
浅黄喜悦・志田純子1994『押切遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告
書第13集
阿部明彦・水戸弘美1999「山形県の古代時編年」「第25回 古代城柵官衙遺跡検討会資料」
古代城柵官衙遺跡検討会
石井浩幸ほか1999「山形県の一般集落の様相」第25回 古代城柵官衙遺跡検討会資料』古
代城柵官衙遺跡検討会

第1表 沖切遺跡出土遺物観察表

査定No.	遺構	器種	法量(m)	形態・調整		胎土	焼成	色調	過仔度	備考
				外・内	ハケメ、ケズリ					
6-1	ST 0 01	須恵器蓋	口径13.0 底径8.2 高さ—	外 ハケメ、 内 ハケメ ナデ	砂粒多	稍良	外・内-灰	20%	クロロ目	
6-2	ST 0 01	土師器 甕	口径17.4 底径8.2 高さ16.6	外 ハケメ、 内 ハケメ ナデ	砂粒少	良好	外・内-にぶい黄褐色	80%		
7-3	ST 0 01	赤燒土器 甕	口径21.4 底径— 高さ—	外 ナデ 内 ナシ	砂粒稍多	良好	外・内-黄褐色	20%		
7-4	ST 0 01	赤燒土器 甕	口径20.6 底径25.4 高さ—	外 ナデ 内 ナシ	砂粒少	良好	外・内-黄褐色	50%		
7-5	ST 0 01	土師器 甕	口径20.0 底径6.4 高さ26.6	外 ケズリ 内 ハケメ ナデ	砂粒多し	良好	外・内-黄褐色	90%		
7-6	ST 0 01	土師器 甕	口径— 底径13.6 高さ—	外 ナシ 内 ナシ	砂粒多	稍悪	外・内-黄褐色	20%		
7-7	ST 0 01	土師器 甕	口径25.6 底径9.4 高さ34.2	外 ハケメ 内 ナシ 口 縁	砂粒多し	良好	外・内-赤褐色	70%		
7-8	ST 0 01	土師器 甕	口径30.0 底径10.8 高さ31.8	外・内 ハケメ ナデ	砂粒少	良好	外・内-黄褐色	50%		
9-1	ST 0 02	須恵器 环	口径14.8 底径11.0 高さ4.4	外 ハケメ 内 ナデ	砂粒少	良	外・内-灰	40%	回転ヘラ切り	
9-2	ST 0 02	須恵器 蓋	口径17.4 底径— 高さ—	外 ハケメ 内 ナデ	砂粒少	稍良	外・内-灰	30%	クロロ目	
9-3	ST 0 02	土師器 甕	口径25.2 底径— 高さ—	外 ハケメ 内 ナデ	砂粒少	良好	外・内-にぶい赤褐色	30%	カマドと接着部に粘土付着	
9-4	ST 0 02	土師器 甕	口径20.3 底径— 高さ—	外 ハケメ 内 ナデ	砂粒稍多	良	外・内-黄褐色	30%		
11-1	遺構外	須恵器 环	口径15.8 底径— 高さ—	外 ハケメ 内 ナデ	砂粒少	良	外・内-灰	20%	クロロ目	

補圖No.	遺構	器種	法量(mm)	形態・調整	胎土	燒成色	調 遷存度	備 考
11-2	遺構外	須恵器 环	口径 14.8 底径 6.0 器高 5.2	砂粒少 良	外・内-灰色	60%	クロロ目回転糸切り	
11-3	遺構外	赤燒土器 环	口径 13.1 底径 6.7 器高 4.9	砂粒多 稍良	外・内-赤褐色	70%	クロロ目回転糸切り	
11-4	遺構外	土師器 甕	口径 4.8 底径 一	外面 ハケメ、ケズリ 内面 一	砂粒稍多 良	黑褐色	10%	
11-5	遺構外	須恵器 甕		外面 タタキ 内面 アテ痕	砂粒少 良	外・内-灰色	破片	
11-6	遺構外	繩文土器			白色粒子多 良	外-黒褐色 内-褐色	破片	
11-7	遺構外	繩文土器			砂粒少 良	外-黄褐色	破片	
11-8	遺構外	繩文土器			砂粒少 良	外-黄褐色 内-灰色	破片	
11-9	遺構外	繩文土器			砂粒少 良	外-黄褐色 内-灰色	破片	
11-10	遺構外	微細剥離痕を 有する剥片	長 33.6 幅 46.1 厚 10.5					
11-11	遺構外	凹石	長 88.0 幅 68.3 厚 34.8					
11-12	遺構外	砥石	長 (81.1) 幅 51.6 厚 20.9					

写 真 図 版



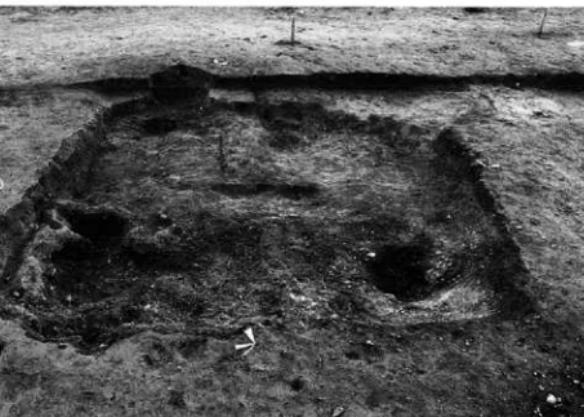
図版1
図版区全景(1)



調査区全景(2)(東より)



作業風景



ST001全景(北より)



ST001カマド



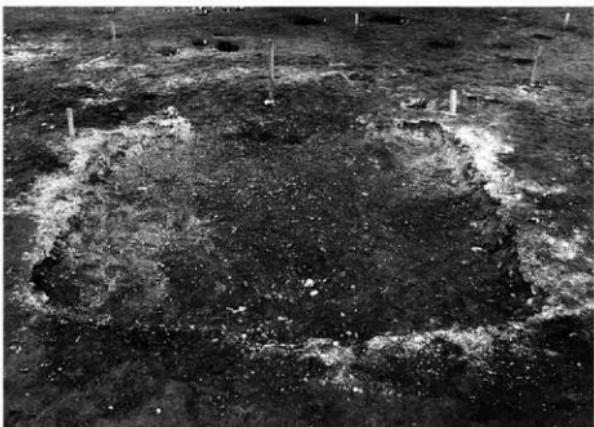
ST001遺物出土状況(1)



ST001遺物出土状況(2)



ST001遺物出土状況(3)



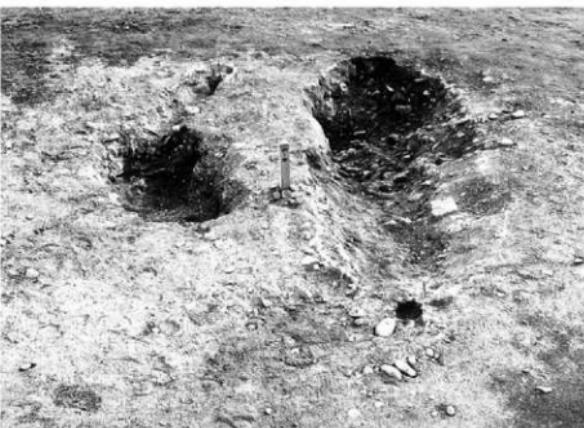
ST002全景(南より)



ST002カマドセクション



SK 001.002



SK 003.004



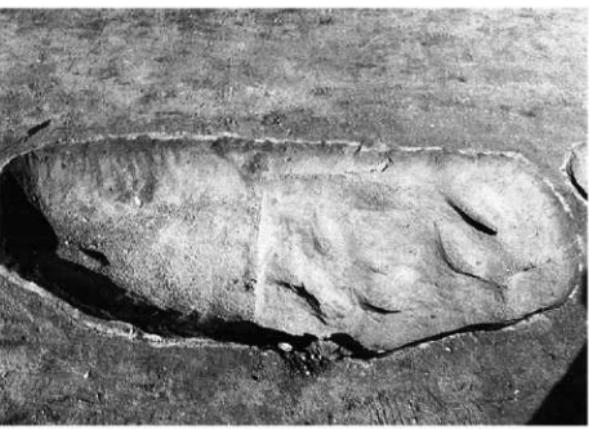
SK 007



SK009



SK011

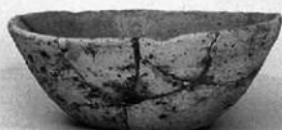


SK012

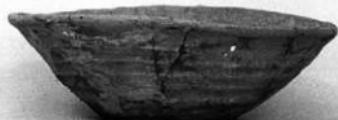




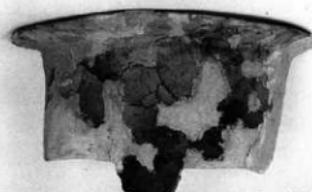
第8図1



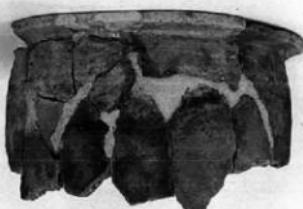
第11図3



第11図2



第8図4



第7図3



第11図1



第6図1



第8図2



第8図3



第7図6



第11図4



第7図2



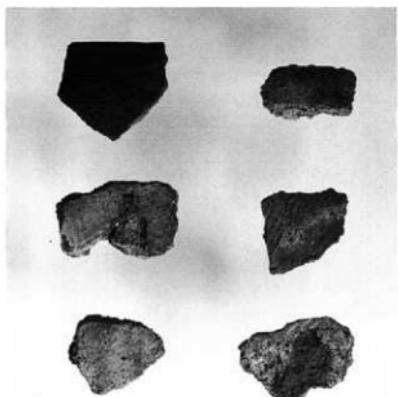
第7図7



第7図5



第7図7



第11図6~9



第7図4



第11図10~12

報 告 書 抄 錄

ふりがな	てんどうしおしきりいせき							
書名	天童市押切遺跡							
副書名	都市計画道路柏木久野本線整備に係る埋蔵文化財調査報告書							
卷次								
シリーズ名	天童市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第25集							
編著者名	押野一貴・山澤謹							
編集機関	押切遺跡緊急発掘調査団							
所在地	〒994-8510 天童市老野森一丁目1番1号							
発行年月日	平成13年3月10日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ　一　ド		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おしきりいせき 押切遺跡	てんどうしおしきり 天童市大字 久野本字古 井戸地内	6210	平成元年 度登録	38° 22' 20"	140° 22' 20"	20000821～ 20000928	1200m ²	道路整備に 伴う記録保 存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
押切遺跡	集落跡	平安時代	竪穴住居3棟 土坑ほか	土師器、須恵器、 石器			特になし	

天童市埋蔵文化財調査報告書第25集

天童市押切遺跡

平成13年3月

編 集 押切遺跡緊急発掘調査団
発 行 天童市建設部都市計画課
押切遺跡緊急発掘調査団
天童市老野森一丁目1番1号
TEL 023-654-1111(代)
印 刷 豊田太印刷所
TEL 023-685-5225(代)
